

# ゆがむモラル

## 介護へコンプライアンスを―高まる現場の危機(上)

ジャーナリスト

横田 一

●よこた・はじめ 1946年東京都生まれ。早稲田大学法学部卒業後、毎日新聞社入社。文化報道センター副部長、学生新聞編集部長、生活家庭部編集委員などを務めフリーランスに。著書に『介護が裁かれるとき』(岩波書店)、『介護と裁判』(同)など。

「老いを社会のみんなで担おう」を合言葉に介護保険が生まれて十二年。ケア(介護)の支え手であるヘルパーや介護サービス事業者の資質やコンプライアンス(ルールの順守やモラル)が問われるトラブルが相次いでいる。団塊世代の高齢期突入による「介護爆発」を控え、ケアをめぐる裁判や事件報道から見えた実情、課題を報告する。

まずは八十九ページの一覧表を見ていただきたい。昨秋から今春にかけて、介護に関わる事件を新聞などからピックアップしたものだ。兵庫、和歌山、愛知の三県で計七人もヘルパーらが警察に捕まっている(起訴は六人)。

これまでもミスによりお年寄りを死亡させたり、虐待で検挙されるケースはあった。一つひとつは個人の犯罪だ。しかし、複数の施設で数人ずつ苦づめるのよう  
に身柄を拘束されるのは珍しい。仕組みのどこかに、ひずみはないのか。

「くるくるパー」「お前の顔見たくないって」

警察沙汰にこそなっていないが、和歌山県海南市にある特別養護老人ホーム(以下、特養と表記)の風呂脱衣場で隠し撮りされたビデオ映像は、とくにショッキングだった。四、五人の女性ヘルパーが入れ替わり立ち替わり画面に登場する。「くるくるパー」と言いな

がら車いすの男性の目の上で手をグーパーとひらひらさせる。入浴後ベッドへ横にし、「死ぬのはお前やけどな。分かるやろ、百歳にもなれば」と毒づく。入浴後二人で抱えた半裸のお年寄りをゴロンと床へ落とし、駆けつけた別のスタッフはお年寄りをのぞき込み、「どうもないか? どうもあつたら困るな。お前へりくつ言うな」といばりまくる。

四十分ほどに編集されたDVDが一月に県や市へ届き、JNNテレビ系列で三月オンエアされた(表の10)。目を覆いたくなるシーンの一部はネットの動画サイトにアップされている。

想像してみよう。入浴は食事、排泄とともに三大介助の一つだ。裸のつき合いは、お年寄りとヘルパーとを熱い信頼関係で結ぶ。温かい浴槽につきかり、生き返って湯から上がる。このうえないひととき。ホッとしたその瞬間、人間らしさを踏みにじられたら、どんな気持ちになるだろうか。

いばる女性職員の横にいた同僚たちの視線は、じつと床のお年寄りへ注がれたまま。「そんな乱暴な言い方やめなさいよ」の一言くらいあってもよさそうだが、誰一人とがめる様子はない。身体的、心理的虐待への

「消極的な加担」だ。

施設でケアされる高齢者には認知症の人が多し。口応えはほとんどしないだろう。それをよいことに、尊厳を碎く言葉を浴びせていく。まるでモノ扱い。世話してやっている、だから文句を言うなといわんばかり。

この特養では次のようなやりとりさえあったと、三月六日付読売新聞和歌山版は報じている。  
入居者「こんな所に来た私が悪かったのよ」  
職員「誰に連れられて来られたん。息子らやろ。嫌がっているんよ。お前の顔見たくないって」

お年寄りの自己卑下と、追い討ちをかける職員の暴言。それでもなお、テレビカメラの前で「個人をいじめようとか虐待とかいうのではない」と弁解する市幹部。ケアという仕事に不向きな性格の人はいる。それにしても、虐待にまでヘルパーを追い込んでいく原因は何か。

「私もいつか共犯に」

「ともかく毎日追われています。言うことが伝わらない認知症のお年寄りに、脅しケアで仕事の能率を上